

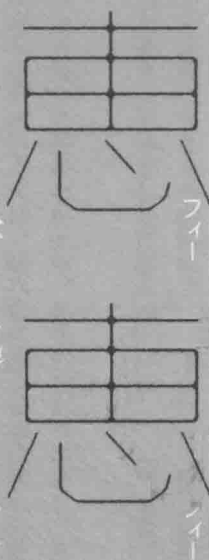


日中の海を越えた愛

恵
恵
ファイ
ファイ

恵恵／岡崎健太／付楠Ⅱ著

文藝春秋



日中の海を越えた愛

恵^{フイ}恵^{フイ}／岡崎健太^{フナ}／付楠^ナ著

文藝春秋

惠恵 フイーフイー 日中の海を越えた愛 にっちゅうのうみ

二〇一四年六月二十日 第一刷発行

著者 惠恵 フイーフイー 岡崎健太 おかざきけんた 付楠 フナナ

訳者 (付楠 惠恵の手記) 泉京鹿 いずみきょうか

発行者 飯窪成幸

発行所 株式会社 文藝春秋

〒10218008



東京都千代田区紀尾井町三一二十三

電話 〇三―三二六五―一一一一

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

定価はカバーに表示してあります。万一、落丁・乱丁の場合は送料当社負担でお取り替えます。小社製作部宛お送りください。本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、私的使用以外のいかなる電子的複製行為も一切認められておりません。

ISBN978-4-16-390073-5

本書の成り立ちについて 毛丹青 1

健太の手記1 その日、恵恵を見つけた 10

健太の手記2 「関係は待っていても良くはない」 14

母親の手記1 日本人の青年と出会った娘 31

健太の手記3 日本を離れる決断 46

母親の手記2 卒業式 53

母親の手記3 日本での婚約の儀式 61

健太の手記4 「私たちは全てを隠さず話さなくてはならないの」 67

母親の手記4 「お母さん、ここを触ってみて」 79

健太の手記5 北京での手術 82

健太の手記6 結婚式をキャンセル 98

健太の手記7 化学療法を開始する 117

健太の手記 8 子どもを作らないという決断 135

健太の手記 9 「わたしたちはやるべきことをやっている」 140

母親の手記 5 静かに涙を流す健太の母 148

健太の手記 10 覚悟はできているから 152

母親の手記 6 恵恵、日本語教師になる 153

母親の手記 7 「健太、あの日、わたしをみつめてくれてありがとう」 159

健太の手記 11 中国で日本人が暮らすということ 183

健太の手記 12 雲飛象カレー店 191

健太の手記 13 再発 208

恵恵の手記 1 わたしは死ぬの? 215

健太の手記 14 立ち直る家族 220

健太の手記 15 新しい病院 三〇七病院 223

健太の手記 16 いったん癌が消える 226

健太の手記 17 退院のあと 230

健太の手記 18 完治しない病 238

母親の手記 8 恵恵と健太は患者たちの希望だった 242

健太の手記 19 本当の友だち 256

健太の手記 20 追い詰められていく恵恵 260

健太の手記 21 「今は幸せだとお義母さんに言えない」 262

健太の手記 22 使える抗癌剤がない 265

母親の手記 9 丸山ワクチン 268

健太の手記 23 北京の青空の下、私たちは確かに生きていた 279

母親の手記 10 美しく懐かしい日本の風景 283

健太の手記 24 伝説の患者 284

母親の手記 11 「どうしても健太と離れたくない」

291

恵恵の手記 2 父の日のメモ

293

母親の手記 12 最後の言葉

294

健太の手記 25 救急車の中で

302

健太の手記 26 静かに逝く

304

母親の手記 13 「今日からはぼくが一人の息子です」

308

健太の手記 27 過ごした日々に悔いはない

310

母親の手記 14 我在天国祝福你

315

本書の成り立ちについて

神戸国際大学教授 毛丹青

北京サッカー・アジアカップ決勝戦をきっかけにして反日暴動が起きたのは二〇〇四年八月のことです。

その四カ月後のクリスマスに、美しい関西学院大学のキャンパスで、ある日本人の青年と中国からの女子留学生が出会いました。

笑顔が愛くるしい利発そうなその女性ジャンソフワイは、詹松惠ジャンソフワイといい、愛称をフイフイ恵恵とっていました。スポーツマンタイプの引き締まった体をした日本人の青年は、岡崎健太君。高校の教員をしていました。

二人はキャンパスに集う大勢つどのなかから、お互いを見つけたし、そして恋におちます。

恵恵が自身の乳がんに気付いたのは、約八年に及ぶ日本留学から帰国し、北京の日本企業での就職も決まり、二カ月後に健太君との結婚を控えていた二〇〇五年のことでした。就職、結婚、日本で学んだことを生かして日中交流に役立つことをしたいという夢……。二七歳の恵恵は目の前がまっくらになります。その可能性を電話で告げた翌日、健太はこれまで一度も訪れたこのなかった北京に、たった一人で文字通り飛んできます。

その日から、二人の、辛く苦しく、けれど明るく楽しい日々が始まりました。

恵恵は、残念ながら、二〇一一年六月にこの世を去りました。

恵恵は私のいとこでした。私は、北京に生まれ日本に二五歳のときに留学し、以来ふたつの国を愛しながら、互いの理解がどのようにしたら図れるかをずっと考えてきました。『知日』という雑誌を中国で創刊し、日本のことを紹介するのもその活動のひとつでした。

しかし、あるとき、気がついたのです。恵恵と健太の物語を日中両国の人々に紹介することで、その一助となることはできないかと。

残された母親の付楠フナギは、娘の思い出を手記にまとめて『我在天国祝福你』として二〇一三年五月に中国で出版しました。それに刺激をうけた健太君もまた、自分で手記をしたためました。この『恵恵 日中の海を越えた愛』は、その二人の手記を編集し、ひとつにまとめ、残されたいくつかの恵恵の文章とともに、一冊の本に編んだものです。

二人が出会って、激しく生きた七年間は、二〇〇四年の反日暴動に始まり、二〇〇五年の北京上海での反日デモ、尖閣諸島をめぐる衝突など、日中間の対立のもっとも厳しかった七年間でもありました。

そうしたなか、二人はそして二つの家族は、習慣や文化の違いを越え、時に激しく議論しな

がらも、互いを^{いたわ}りあい、互いの幸せのために生きました。

本文の母親の手記にもありますが、苦難をのりこえ、よりよく生きようとした二人の姿は中国の人々に大きな感動をあたえました。

この日本語版が少しでも日本の人々に、互いの理解を考えるきっかけになってくれることが、日本を愛し、健太を愛した恵恵の遺志でもあると考えています。

二〇一四年 四月

本書の成り立ちについて 毛丹青 1

健太の手記1 その日、恵恵を見つけた 10

健太の手記2 「関係は待っていても良くはない」 14

母親の手記1 日本人の青年と出会った娘 31

健太の手記3 日本を離れる決断 46

母親の手記2 卒業式 53

母親の手記3 日本での婚約の儀式 61

健太の手記4 「私たちは全てを隠さず話さなくてはならないの」 67

母親の手記4 「お母さん、ここを触ってみて」 79

健太の手記5 北京での手術 82

健太の手記6 結婚式をキャンセル 98

健太の手記7 化学療法を開始する 117

健太の手記 8 子どもを作らないという決断 135

健太の手記 9 「わたしたちはやるべきことをやっている」 140

母親の手記 5 静かに涙を流す健太の母 148

健太の手記 10 覚悟はできているから 152

母親の手記 6 恵恵、日本語教師になる 153

母親の手記 7 「健太、あの日、わたしをみつけてくれてありがとう」 159

健太の手記 11 中国で日本人が暮らすということ 183

健太の手記 12 雲飛象カレー店 191

健太の手記 13 再発 208

恵恵の手記 1 わたしは死ぬの? 215

健太の手記 14 立ち直る家族 220

健太の手記 15 新しい病院 三〇七病院 223

健太の手記 16 いったん癌が消える 226

健太の手記 17 退院のあと 230

健太の手記 18 完治しない病 238

母親の手記 8 恵恵と健太は患者たちの希望だった 242

健太の手記 19 本当の友だち 256

健太の手記 20 追い詰められていく恵恵 260

健太の手記 21 「今は幸せだとお義母さんに言えない」 262

健太の手記 22 使える抗癌剤がない 265

母親の手記 9 丸山ワクチン 268

健太の手記 23 北京の青空の下、私たちは確かに生きていた 279

母親の手記 10 美しく懐かしい日本の風景 283

健太の手記 24 伝説の患者 284

母親の手記 11 「どうしても健太と離れたくない」

291

恵恵の手記 2 父の日のメモ

293

母親の手記 12 最後の言葉

294

健太の手記 25 救急車の中で

302

健太の手記 26 静かに逝く

304

母親の手記 13 「今日からはぼくが一人の息子です」

308

健太の手記 27 過ごした日々に悔いはない

310

母親の手記 14 我在天国祝福你

315

デザイン

関口聖司

恵恵 日中の海を越えた愛

健太の手記 1 その日、恵恵を見つけた

今年も催されるのだろうか。私たちがめぐり逢った少し早めのクリスマス・パーティーは。

あるとき私は、友人と母校の関西学院大学の留学生歓迎クリスマス・パーティーで饗きやうされるご馳走を平らげていた。膨はくれた腹を揺らしながら会場の外に出た瞬間、彼女が視界に飛び込んできた。ロビーの端にあるソファアーに腰掛け、小さめのガラステーブルに膝をよせるようにして友だちと談笑していた。

少し距離があつたが、長い艶やかな黒髪をもつ、きれいな輪郭の顔だちの美人だとひと目でわかつた。大きな澄んだ瞳を見開いて熱心に友だちの話に聴き入っている。

束の間、彼女に見とれていた私は、隣にいた友人の「彼女たち中国人留学生だね」という言葉で現実に戻された。彼は中国への留学経験があり、時折届く彼女たちの声から中国語だと判断できたのだ。外国へ何度も旅行し、実家は留学生のホストファミリーもやっているわりに、日本語以外話せない私は、渡りに船とばかりに彼をひき連れて話しかけにむかつた。

ちょうど席を立ち、歩きだした彼女たちに声をかけた私だったが、そのひとは見知らぬ男性に話しかけられた警戒心から一步退いた。しかし友人が中国語で話したところで興味を持